第26号 執筆者@短信

三嶋　あゆみ　新連載

はじめまして、風刺マンガの三嶋あゆみと申します。千葉晃央さんにお誘いいただき、参加させていただくことになりました。

「風刺」は、庶民のくらしの中にあると思い、共感を大事にして描いています。

経歴は、京都精華大学で風刺マンガを専攻し、現在は印刷デザインの仕事をしながら、年2回のグループ展で新作発表するペースで制作しています。

このような先端の場で学ばせていただけることをありがたく思います。どうぞよろしくお願いいたします。

ブログ：http://fooshi.exblog.jp/

松村奈奈子

総合病院に勤めていた頃は、時間に追われる毎日で、学会と言えば一般の精神科医が参加するものに参加するのがやっとでした。

退職後は嘱託医の仕事が中心で時間に余裕ができたので、勤務医時代に気になっていた精神科ではちょっと脇道的な分野の学会に出かけて、なるほどなるほど…を繰り返している日々です。

さらに、もともと旅がすきで、地方のまちを訪れて“まちの個性”を感じながらふらふら歩くのが楽しみです。小さいまちながら文化が豊かなまちもあれば、久しぶりに訪ねると立派な箱ものだけが残ったさみしくなったまちも…想像していたイメージとのギャップの発見も面白いのです。

学会を理由に、旅にでるのが楽しみです。先日の学会は福岡でした。博多の繁華街にある市営地下鉄“天神南駅”の広告看板のひとつに目が留まり、びっくりしました。

“里親”にはいろんな意見があるとは思います。でも、実親と生活できない子ども達からは“里親さんとこに住みたい”とよく聞きます。そして、里親さんが足りない…というのも事実です。

学会での話からも、福岡の“児童虐待”に対する多職種間の対応の手厚さに、驚きました。

そして！博多の繁華街、天神南の駅にこの駅看板…こんなの、我がまち京都にあってもいいかなと私は思いました。

ガヴィニオ重利子

休み明けブルーに見舞われているガヴィニオです。2ヶ月間という長い夏休みを経て、今週から子ども達の学校やら自分の仕事やらが再開しました。

この2ヶ月という長い夏休み。欧州では会社勤めの人も3週間ほどの休みをとることが一般的で、バカンスと呼ばれる長い旅行に出ることが習慣のようになっています。この時期、バスの中やスーパーの立ち話でも多くの人がバカンスの思い出話に花を咲かせていて、これから始まる仕事の日々に人々は憂鬱な顔を隠そうともしません。その話に耳を澄ましていると「（頭の中が）真っ白になれてよかった」とか「ちょっと（今の生活から）離れてみられてリフレッシュした」など、別世界へトリップしてきた的な感想が多いことに興味惹かれます。

普段の生活から少し離れる時間をつくることで、日常ではしないような考え事や普段は気にかけていなかった子どもの様子に気づく機会が増えるな〜と、私自身この長期休暇を体験するようになって感じています。ちょっと別世界に行くことで自分の普段の生活を俯瞰するような体験をしているのかもしれません。

というわけで、今回は子ども達と過ごした長い夏休みを通して考えさせられたことを記事として投稿させていただきました。良かったらぜひ読んでみてください。

奥野景子

今回の短信では、小学生の時の七夕の思い出について書こうと思っていた。いゃ、その思い出を軸にずいぶん前に短信を書き終えていた。でも、それを書き終えてから色々なことがあった。面倒だなと思うこともあったが、そんなことでさえ私に大切なことを気が付かせてくれた。

七夕の思い出では、それについて書きたかった訳ではなく、その話を通して今まで伝えられなかったことを言いたかった。だから、それだけ書いておこうと思う。「〇〇〇ちゃん、七夕の少し前に笹の木を持ってきてくれるの嬉しかったよ。ありがとう。大人になってから七夕が近づくとあの頃のことを思い出します。ありがとう」

続いて、最近できた書きたかったことについて。ある研修会での出来事。「訪問するということは、患者さんの世界にゲストとして家に招かれることになります。また、その人の人となりにさらされ、どんな文脈で日々の生活を送っているのかに触れられる機会にもなります」と通訳の人が言った。訪問看護を行なう人の質問に対する回答の一部がこれだった。‘あぁーーーー、そーですよね！！’と思う一方で‘患者さんっていう言い方は、あんまり好きじゃな

いけど…’と思っていた。

色々な人やもの、ことが、色々な方向から、色々な姿、かたちで、思いもよらないことを私に伝えてくれている。今わからないことでも、いつかわかるのかもしれないし、気が付いたらわかるようになっているのかもしれない。今気になっていることでも、いつかどうでも良くなっていることもあるのだろう。まぁ、いろんなことがあり、いろんなことを考えた数か月だった。

馬渡徳子

「生きていると、良いことがあるなあ。」今年の夏は、そう、実感できる事がありました。

七月の全国的な「ソーシャルワーカーデイ」企画を、地元でも社会福祉士会、精神保健福祉士会、医療ソーシャルワーカー協会の三団体共催で実施することができたのです。企画では、各団体の会長よりの活動報告と、若手三人のソーシャルワーカーが、「意思決定支援」をテーマに実践を語り、たっぷりと交流しました。

ここ数年、地元でも多職種連携企画が進み、それはとても面白い出逢いが度々ありましたが、この度のソーシャルワーカーだけでの企画が、「逆に」新鮮で、 その日の朝夕に、ちょっとスピリチュアルな体験をしました。

季節外れの　アゲハ蝶
朝夕と、肩にとまりて
じっと我れを見る

一周忌を終えたばかりの義父が
「よしよし」と声をかけてくれている
ような気がした。

柳　たかを

「東成区の昭和・思い出ほろほろメモ」も 3 回の掲載で 42 話まで進みました。内容は作者の子供時代の記憶をふくらませ、いわゆるオチのある 4 コママンガとは違うストーリーマンガのような 4 コマ形式のマンガで綴ったものです。

誰もが持つ両親、兄弟、祖父母、おじさんおばさんらとの思い出、むかし上京した折、東京銀座の名画座で見た小津映画「東京物語」や「晩春」のしみじみした感動の記憶にも影響を受けていると思います。

この後も、少しずつシーンを変えて続くのですが、ここで突然ですが、別シリーズのコミックマンガを 8 回の予定ではさませていただきたく思います。

これは物のなかった昭和 30 年頃の子供遊びをテーマにしたもので、「トンボ釣り(捕り)」の話です。

トンボ捕りとは違いますが、昭和 32 年の 8 歳の時、夏休みに帰省した和歌山県の田舎で小魚やウナギを罠で捕る仕掛け漁を体験しました。

夜中に松明(たいまつ・初めて本物を見ました)の明かりで大人の膝下くらいの水深の川面を照らしながら、水中のコーナーに竹筒の罠を一本ずつ沈め大きめの川石を上から重しにのせます。

罠の竹筒は、一方にウナギが入れる竹串で編んだ入り口があり、奥に進むほど狭くなるロート状になっています。ウナギは一度入ると出れなくなる。

竹串の奥にウナギの好物(ミミズだったと思う)を団子にして仕掛けます。

罠を仕掛けてはジャブジャブ進むおじさん(父の兄)のあとをついて歩きました。

翌日、水から引き上げた何本かの竹筒から太いウナギがゾロゾロ出てきたのを見てビックリしたものです。当然、その晩はアツアツの蒲焼きを夕食にいただきました。

そんな自然を相手にした思い出を描いたマンガを掲載したいと思いました。

齋藤　清二

あっという間に前期が終わった。総合心理学部の一年生達は、それなりに自分自身がその中に住み込んでいるところの新しい世界を日々自分のまわりに創りだしている。部分的にとはいえ、その行程に付きそうことができることは楽しいことである。応用人間科学研究科のほうも私自身 2 年目に入り、ようやく全体の動きや自分自身の立ち位置が少し読めるようになってきた。公認心理師のカリキュラムも今年度中には公開されるだろう。色々なことが移り変わっていくが、だんだんに短期記憶能力が減退し、刹那刹那に明滅する今ここだけに住むようになっていくことは、限られた生命をやりくりしていく身にとってはたぶん良いことなのだろうと思う。

石田　佳子

今回は、海外に住む日本人には看過できない問題として迫ってくる、日本人“村”社会について考えてみました。マレーシアに限らず海外で暮らすことについては、そのポジティブな面ばかりが取り上げられて脚光を浴びがちであるため、まるで楽園であるかのような幻想を煽ってしまいかねません。しかし、何事にも光の面だけではなく影の面があり、その両方を知ってこそ全体像が見えて来るとの思いから、あえてその影の面について多く書きました。

今思うと、私自身も光の面を拡大視して都合の良い夢を想い描いていたのかもしれません。マレーシアで暮らし始める前には、（他国と比べて、退職後に移り住む夫婦が多い）日本人コミュニティの良い面しか目に入らず、多くの先輩（年長の）方と知り合うことでこれから直面する『老いること』についてのヒントや手本が得られるかもしれないと喜んでいたのですから。

もちろん、マレーシアに来たお陰で知り合うことができた日本人の中には、「素敵な年のとり方をしているなぁ」と感服させられる年長者もいました。その人たちはおしなべて、人間関係における境界の保ち方が見事でした。具体的には、助けを求めた時にはしっかり手を差し伸べてくれるけれど、そうでない時には余計な口出しをせず、放っておいてくれる余裕があります。そしてまた、「自分もここへ来た当初は多くの先輩方にお世話になった。その相手に恩を返すことはできなかったけれど、代わりに今、新しく来た人の役に立てれば良いと思う。感謝してくれるなら、いつか余力が持てた時、あなたも同じように（私にで

はなく別の助けが必要な人に）尽くして欲しい」と言うのでした。

一方、失礼ながら「反面教師にしよう」と感じてしまう年長者もいました。彼らは人間関係における境界が不確かか存在しないかのようで、相手にも意見や好みがあること、自らの（“〜べき”という）規範が狭い集団内でしか通用しない偏ったものであるかもしれないことには、気づかないようでした。具体的には、「皆そうだから（同じくするのが当たり前）！」とか「それが（日本人の）常識でしょう？」などという決まり文句で強引に人を動かそうとします。また、最初のうちは親切ですが、いずれ必ず“お返し”を求めて来ます。「今までお世話をしてあげたのだから、今度はあなたが私のお世話をしてね！」と言われるのはまだ序の口で、「俺の子分になれ！」と言われた人さえいるという話です。（笑）

最近では、人から何かしてもらっても「当たり前」と捉えて“お返し”など考えもしない、ちゃっかりした人が増えているといった噂話も耳にします。私の感覚では、お世話になったら恩義を感じるのが「当たり前」ですが、そもそも“お返し”というのは自発的な感謝の表現であるはずで、強制されて行う義務ではないと思います。

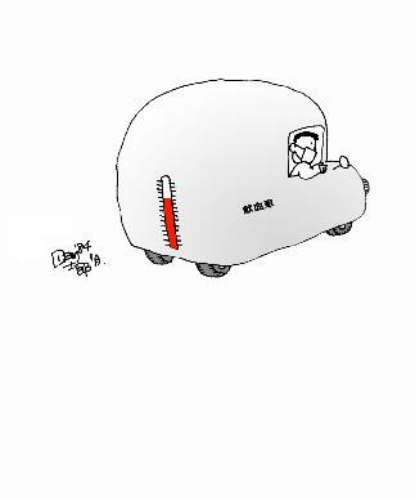
また、「空気を読む」とか「察する」ことを美徳のように考える日本人には、「言葉にしなくても、わかりあえる」関係が理想なのかもしれません。しかし実際には、相手の意思を確認せず（自分の意思を伝えず）に、「わかったつもり」になっているだけのことも多いと思います。結局、相手が日本人であろうとなかろうと、親しい間柄になっても、人の意思や自由を尊重すること、適切な自己主張をして被害者にならないことが、大切なのではないかと考える昨今であります。

しすてむ♪きよたけ

東京・江東区北砂!!僕が暮らしているアジト（シャアハウス）住人募集中！

東京に拠点が欲しい方、1 名様限定で入居可能！月々、初月 6 万、以降 4.5 万円/月（光熱費込）。

NG の方は、パーティー好きの方。その他、NG はございません。是非、080-4116-7443（清武）まで電話してネ！



最近、団遊さんにお時間頂き、清武システムズ（僕の会社？看板？）と他の組織・チームいわいる社会システムとの関与のあり方について、相談させていただきました。というのも、「僕はあちこちに行きたい」、「一つの機関に所属をしたくない」という性質があるのですが、その仕組みを考えることを 1 年ほど忘れていたのでした。

考える始まりは「失恋」。金沢で「ヒモ」をしていたのですが、ぷつりと切れ、今手元にある、仕事とネットワークを見つめ始めたのでした。失恋して慌てたってとこですね。

清武システムズは、今居るところと、そこから繋がっていくネットワークがあったり、無くなったりしていました。だから、今、ここに、あるを大切にしようと思ったのでした。これは、そもそも好んでいた動きだったと気付きました。

さらに、もう一つの気づきがありました。清武システムズが何を行っているのか。遊さんと話している最中のことでした。場においてもらい、何かに反応し動き始める。それを通して、現場で何が起きているのかを整理し、また、動き始めていました。

この 1 年数ヶ月を振り返ると、給与も上がりました。組織が、検討し何らか動いて下さった結果でした。下がったものもありましたが、他者の人生の分岐点により、僕が担わない仕事が出たというだけでした。

まだまだ、何をしているのかわかっていない、清シスですが、今あることから一歩ずつ進み、結果として何をしてきたのか、自分でわかる日が来るといいな〜と思っています。が！清シス利用者の方の声も集めさせて頂きたい次第です。ご協力お願いします。

あ、失恋数ヶ月後の今、彼女ができました。タイミングが良かっただけだと思うけど、完全にコロコロ彼女が変わっていて遊び人的な印象が出てしまうかも？もう、恋愛や色恋ごとからコミュニケーションとコミュニティーについて話し始めるんじゃないかと思ってきた、今日この頃です。

主な所在は、金沢と東京。9 月から、東北 4 県へ。東日本・家族応援プロジェクトで行われる、家族漫画展のアテンドとして、行きます。パネルと冊子と場と仲良く戯れたいと思います。

小林茂

あくまで北海道基準ですが、まだまだ暑い日が続いております。皆様、いかがお過ごしでしょうか。

私は、7月半ばから8月半ばまで過密スケジュールとなり、またもや車での移動が続きました。自宅でゆっくりする暇もなく毎日が過ぎました。ようやく一息ついたと思ったら、珍しく日高地方に大雨と台風が続き、こちらも過密気味。いろいろ物事は、続くときは続くものだなぁ、と感じています。

さて、『対人援助マガジン』の連載を始めて、どこか自分に満足できないでいました。何故かと自問したら、“遊び”がないことに気づきました。そんなこともあり、短信のコーナーで遊ぼうという考えになりました。次回から（もしかして、短信ではなく、いつか本論にしてしまいそうな誘惑にかられながら…）私の温泉訪問記をしようと思います。北海道を中心に温泉レポートに励みたいと思います。

水野スウ

ちょうど一週間前、パソコンが急に動かなくなりました。パソコンを入院させて、その翌日から私は、広島と岡山へ出前の旅。スマートフォンを持たない私なので、旅している間はいつもアナログな時間を過ごします。

石川に戻って、入院中のパソコンに会い

に行くと、いよいよもう二度と起きあがれないくらい弱ってるようだ、とお店の人。

だったらいっそこのままアナログな日々を送ろうか、なんてこと、マバタキの一瞬くらい脳裏をかすめはしたけど、いやいや、まだまだ手放せないなあ、伝えたいことたくさんあるし、広めたいこといっぱいあるし、メールやフェイスブックで知りあった人たちとも、この先おおいにつながっていきたいし、新聞やテレビがすでに報道しなくなったあれやこれやを、一人ひとりの市民メディアが知らせようとしてくれているのだし、と考えた挙句、この不思議な薄い板のようなものは、やっぱり今の私にとって必要な、暮らしの中の道具なのだ、と逆に実感しました。

とはいえ、私は機械にからきし弱くて、とりセツ読むのも超苦手。急遽、娘に SOS 出して助けにきてもらい、新しいパソコンを買うところから、立ちあげて動くようになるまで、すっかり子どものように面倒見てもらいました。

そもそもこんなことでもないとめったに帰らない、娘の 1 年ぶりの帰省。おかげでマガジン原稿も、ギリギリセーフで締め切りに間にあいましたっ！

高垣愉佳

2 年以上に渡ってお付き合いいただきました、ラホヤ村通信は今回が最終回です。丁度今月、アメリカでお世話になったチューターさんが日本へ遊びに来てくださいました。京都、奈良、広島、東京と一緒に観光してまわりました。

次号からは精神科訪問看護日記「おじゃまします」の連載をスタート予定です。次の連載も keep in touch! お付き合い願えれば幸いです。

浦田雅夫

京都三条にある児童養護施設退所者のための居場所。月に一度は昼食会。手作りの料理を食べて、またちょっと頑張れる。そんな人たちが集っています。詳しくは、facebook Minuet Kyotoaftercare まで。

早樫一男

今年の夏、京都の祇園祭の巡行に関与することになりました。裃を身に着けて、函谷鉾（かんこほこ）の前を歩くお供の役割です。出発は9時ですが2時間前ぐらいから裃の着付けが始まり、巡行が終わり、役割を終えたのは13時前でした。4時間近く、京都市内を歩くので、熱中症や体力を心配していましたが、その点は大丈夫でした。しかし、初めて身に着けた裃の着付けがかなりしっかりしていたので、時間が経過するほど、腰の締め付けが辛くなり、とても堪えました。とはいえ、大役を果たしたという充実感や達成感があり、機会があれば、もう一度、歩いてもいいかと思っています。

中島弘美

家族カウンセリングをしている中島です。

批判的な発言をする子どもや、親代わりの行動をする(とと姉ちゃんのような)子どもは、しっかりしているように見られがちですが、やはり子どもは子どもなので、両親や周りにいる大人の手助けが必要です。と、いう内容の小文を児童心理 2016 年 10 月号臨時増刊「小学五六年生の家庭教育」金子書房『思春期の入り口にある子どもたち 親に批判的になる～家族カウンセリングの立場から～』の題で書かせていただきました。

ここでは、家族療法構造派のミニューチンが説明する、境界(バウンダリー)の概念についても触れました。バウンダリーの考え方は、家族全体の理解だけでなく、他者との適度な距離の在り方についても、認識を深めることができ、特に日本人に多いとされている対人恐怖症の治療に有効な視点と考えられています。今後、連載『カウンセリングのお作法』でも取り上げたいと思っています。

藤信子

今年が猛暑だということを誰かとの挨拶の度にしている。猛暑に加え、歳を取ったので、あまりたくさんの仕事は出来なくなったと、断っている。あと半年、集団精神療法学会の編集委員長としての仕事が結構あるが、その後は少し頼まれることを減らして、自分の楽しみに使いたいと思っている。やりたいことがいくつかあって、そのことを考えて一人でニコニコしている。したいことをするためには、ちょっと体を鍛えなければとも思う。だから、毎日自分の事で忙しい。

中村周平

先日、車いすごと後方に転倒するアクシデントが起きました。すぐに救急車で最寄りの病院に搬送してもらい、CT による撮影。幸いにも打撲ということで事なきを得ました。ただ、かなりの速度で転倒したために脳震盪を起こしていたようでして、めまいや PC 画面を見ると不快感が出るなどの症状に悩まされました。転倒から一か月ほど経とうとしていますが、完治には至っていないのが現状です。研究で脳震盪のことは人並み以上にはわかっていたつもりでしたが、本当に「つもり」だったみたいです。脳震盪の恐さを実感した今日この頃した。

浅田英輔

職場でいろいろな便利システムを作るのがすきです。主に Excel を使って、いくつかの必要項目を打ち込めば、勝手に計算したり入力したりしてくれるようにします。ウェクスラー式の知能検査は、数値を出すのがどんどん面倒になっていっている印象がありますね。毎回同じ本のデータを調べて書き込むという手間は、私は無駄だと思っています。その無駄を省き、生年月日と検査日と粗点を入れると結果が出るような便利システムです。一度使うと手放せなくなります。5 年も前でしょうか。

Twitter で知り合った人から「WAIS も作ってよ」と頼まれました。プログラム部分は大したことをしていないのですぐできるのですが、一番大変なのはデータ入力です。あのテキストに書かれている数値を全て打ち込まなければならないのです。「データ入力やるなら作ってもいいよ」と答えました。ファイルのやり取りをするのはもちろん簡単ですし、Twitter を介して、共同で WAIS 自動計算システムが出来上がってしまったのです！すごいね！インターネット！

中村正

この夏は刑務所からでた後のやり直しの人生を聞くという調査をしていた。主要には地域生活定着という概念で対人援助の重要な領域を成しつつあるので、そのニーズを探るために、まずは本人たちの出所後の生活の詳細を語ってもらい、そこにある社会臨床的なテーマを洗い出す計画である。それはとてもユニークなインタビューとなった。本人しかなし得ない犯罪からのやり直しの軌跡である。もちろん帰住先のある人はそこに帰るのだが、帰る先のないひとたちのその後の人生は確かに波瀾万丈であった。分かりやすいニーズは出所の曜日と時間である。できれば月曜の朝一番にして欲しいこと、連休の前や金曜日は止めてほしいこと、なぜなら出所後に公的機関にいく必要があり、生活と住居の段取りをとりたいからだという。何年か先の出所の日は決まっている。しかしその曜日まで教えてほしいという。さらに地方の刑務所から出る場合は、土地に詳しくないので、最寄りの駅までの地図や交通機関の案内くらいは欲しいという。こうして、当面の住まい探しや職をえるまでの苦労の話がたくさんだされた。こうした詳細に社会の様子が詰まっている。いろんなことがみえてくる。実に面白い。出所者にできれば刑務所のなかで配布したいと思って冊子をつくる予定である。社会でのやり直しがきかずに再び戻る人もいるし、そうなると刑務所が暮らしやすくなり、「自由はないけど不自由でもない」となっていく。語源からすると「しゃば」は苦界でもある。更生をどう支えるか、考えさせられる調査はまだまだ続く。

牛若孝治

自分の中の『残虐性』にも気づいてください。相模原市で起きた障害者大量殺傷事件。テレビの報道によれば、戦後最大で最悪の大量殺傷事件である、と言っている。そして、この手の事件が起きる度に、精神科医やその他の専門化と証する人たちが、いろいろとコメントしている。

一方、巷では、大量殺傷事件を起こした犯人に対する轟々たる批難を浴びせている。確かに、この犯人の起こした事件は、私にとってもショッキングであり、犯人への怒りと悲しみを禁じえない。その一方で私は、この手の事件が起きる度に、「自分の中の残虐性」にも気づかされる。つまり、「残虐性」というのは、この犯人だけではなく、人間であれば誰しもが多少とも持っている。その「自分の中の残虐性」が出たときに、いつだって殺人の加害者になりうる。だから、殺人事件と言うのは、決して人事ではなく、いつもいつも自分と関わっている。そういう意識が、この社会の人たちにどれだけ根付いているか。残念だが、こうした殺人事件が起きる度に、自分を被害者として位置づけ、ただただ加害者を批難したり、被害者に同情するだけで終わっているような気がしてならない。そこで私は言う。「今、この犯人を批難しているそこのあなた、自分の中の『残虐性』にも気づいてください」。

袴田洋子

先月に引き続き、「アラフィフ夫婦」のどうしようもない日々を綴りました。仕事は順調です。自分の事務所で忙しく、充実した日々を送っています。それと対照的に自分の私生活の幸福度はどうなのだろうとまじめに考えている日々です。あまり考えすぎるとよくないだろうことはわかっているので、「感謝の気持ちを忘れずに」を念仏のように唱えるわけです。ああ、本当に「家族で居るには努力が要る」って、すごい言語化です。

団遊

本稿に手が回らず、著者短信のみの参加となってしまいました。年々「書く」ことへの頭の切り替えができにくくなっているような気がします。

先日、年齢がばらばらなメンバー6 人ほどで話をしているときに、「最近の若い子はよく飲みに行く」という話になりました。仕事の後の「飲みに行こうぜ～」や、何がなくても「ちょっと一杯行こうぜ～」が増えたというのです。実際にぼくも自社の若いメンバーたちを見て同じ印象を持っていたので、それは何故かと考えました。

そして思ったのは、縦横のつながりを求める人が増えたから、煽りも含め社会不安を自分ごとに感じる人が増えたから、つまり、助け合って乗り切ろうと考える若い子が増えたからではないでしょうか。

ちなみに 40 歳過ぎのぼくは、周りも含め「飲み会なんて、社員会なんて、横のつながりなんて、いる？」という世代です。でも、もうひとつ上に行くと、「飲んでなんぼ」な世代があります。「互助」で乗り切る必要性があった時代から、やがて豊かさとともに、何でも自己完結（とアウトソース）できる時代が来て、また「互助」で乗り切るしかない時代に差し掛かっている。そう考えるのは、飛躍し過ぎでしょうか。

大石仁美

またまたワンちゃんのお話を。

ワンが一歳三か月になったある日、人間でいえば17～18 歳の生意気盛りの頃、突然反抗期らしきものが始まりました。お散歩から帰ると、雑巾で足を拭いてから室内に入るのですが、「足！」と言うと前足を交互に出し「うしろ！」と言うと、後ろ足をひょいと持ち上げて拭かせてくれていたのですが、濡れた雑巾を見た途端、「おれ、寝そべっているから、勝手にふけや！」とあられもない恰好で、面倒くさそうに足を出すのです。なんと横着な！同時にハンストもやり始めました。空腹のくせ

に食べないのです。理由は明らかです。ドッグフードの上のトッピングが気に入らないのです。
「なんだこりゃぁ。また生野菜か。おれは鳥じゃないんだから。肉か魚、卵焼きでもいいぜ。美味しいものをくれ！」彼は横目でチラリと茶碗をみて、「ふん」という顔をして無視します。「そっちがその気なら我慢比べだ。やらないぞ。今日はこれしかないんだ。我儘は許さないからな。」
　そして一時間、二時間と過ぎていき、私は出勤。昼休みになって、さすがに彼も空腹に耐えられず、食べたであろうと家に帰ってのぞいてみると、出勤するときのままの状態でじっと座っているのです。「おい、いい加減にしろよ。」顔を覗き込むと、哀願するような目でコチラを見ます。「わかった、わかった。負けたよ」
　肉を少しばかりフードに混ぜると、「かあちゃん、やっぱり話わかるぅ。」とにじり寄ってきて、食べ始め、生野菜もぺろりと完食。負けました。
　「そういう時は取り上げなさい。一回二回食べなくてもどうってことありません。」と、トレーナー。分かっているけど、ああ、かあちゃんはダメだ。甘いなぁ～
　でもね、可愛いでしょ！！
　人も動物も、同じ時間を共に生きているっていうのがなんとも心地良いんです。

村本邦子

　この夏ひと月を台湾で過ごした。出発前、かなりの数の台湾映画を観て、歴史の本を読んだ。興味津々で台湾を回ったが、いろいろありすぎて、とても語り尽くせない。
　たとえば、私にとっての台湾は温泉であるとする。台北近くの北投温泉は、加賀屋を初め高級旅館が並んでいて、日帰り温泉でも結構高い。最初はその値段に馴れなくて、安いところを探したら、なんとびっくりコンビニに温泉があるのを見つけた。脱衣スペースもなく、ザブーンとお湯に浸かったら、あふれ出たお湯で、隅に置いてあった靴やら着替えやらがプカ～ンと浮いて流された（きっと想像できる人は誰もいないと思う・・・）。でも、コツをつかむと快適だ。
　そうこうするうちに値段の高さにも少し慣れてきて、「少師禅園」という高台にある絶景温泉に行ってみた。看板の説明書きを見ると、第二次世界大戦末期、神風特攻隊の接待所として使用されていたとある。特攻隊については、そこそこ詳しいつもりでいたが、台湾に特攻隊があったことは知らなかった。調べてみると、台湾には4つの特攻隊基地があった。当時は日本人だった台湾人たちが逝ったのだ。もう少しで特攻隊の生き残りの方とも会えそうだったが、時間が足りず残念だった。
　たとえば、私にとっての台湾はかき氷だとする。台南の有名なフルーツ氷屋さんを目指すと、クラッシックな洒落たビルディングがあって、近づいてみると、「愛国婦人会館」の看板がかかっている。一瞬ギョッとするが、戦時中、台湾に愛国婦人会の活動があったことは知っていた。台南の古跡に指定され、以前は図書館として使用されていたが、現在はイベントスペースになっているそうだ。ちなみに、氷屋さんのトイレを利用すべく2階に足を踏み入れると、「愛国婦人会館」の昔の写真がたくさんある。
　台湾にいると、どこへ行ってもこういうことと出会う。「慰安婦」の支援をしている団体を訪問したが、レトロな問屋街で有名な迪化街におしゃれなミュージアムが間もなくオープンするそうだ。もうこれ以上書かないことにするが、私たちはもっともっと台湾のことを知る方がいいと思う。とりあえずのお勧め映画は、「セデック・バレ」「モンガに散る」「GF・BF」「海角7号/君想う国境の南」「言えない秘密」、歴史本では、周婉　窈『台湾の歴史』など。

セデック・バレ

國友万裕

　原稿を提出してからすぐに、原稿の中に書いたかつての教え子から Instagram のリクエスト承認が届きました。しばらく返事がこなくて心配していたので、うれしかったです。
　その後、彼と同じく1年半前に卒業した教え子から突然メッセージが来て、「だいぶ仕事が落ち着いてきたから一緒に飯行きませんか」というお誘いでした。さらに、もう一人、３年ほど前に教えていた子のFacebookを見つけて友達リクエストを送ったところ間髪を入れずに承認が来て、一緒に飯に行くことが決まりました。うれしいですよね。自分のお父さんくらいの年の人とつきあうのはウザいと思う若い人が多いと思うんだけど、こんなたくさんの若い男性がぼくと飯行ってもいいと思ってくれている。
　このところ、ぼくは開き直って、Facebookの承認の幅も広げてしまったので、次々に誘いが来てお金が困るくらいです。しかし、若い頃に友達がいなくて、ぼっち君だったぼくにはいま遅れてきた青春が夢のようです。人間の人生って本当に不思議。運命の力っていうのは確実に存在するんだなあ。若いときの埋め合わせを運命の神様がしてくれているみたいです。運命に感謝したいと思います。

北村真也

認定フリースクール「アウラの森　知誠館」代表。（http://tiseikan.com）
　今回から始めるのは、不登校経験を持った若者たちのキャリア形成をテーマにしたものです。みなさんさん、よろしくお願いします。

古川秀明

　新しい CD ができて本当によかったです。是非大勢のみなさんに聴いて欲しいです。団先生のイラストも素敵ですよ。黒猫フィナンシェを白抜きで表現されるのには脱帽でした。

シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき

西川友理

　京都西山短期大学で保育士養成をしつつ、いろんなかたちで学生支援をさせていただいています。
　相模原の障害者施設での殺人事件。授業でも取り上げ、皆で話をしました。

こういう事を授業でとり上げる時にいつも気を付けたいなと思うのは「社会福祉的には不正解だけど、今の社会情勢的にはこっちの方が正解でしょ」「教科書ではこう書いてあるけど、本音では、そううまくいかないでしょ」という発言を大事にすることです。「こういうのは間違えている」「そういうのは福祉的におかしい」「社会の方を変えていかなきゃ」と言うのは簡単だけれど、ファーストインプレッションで感じたことを素直に言える雰囲気を大事にしたいと思っています。学生も、私の授業を半年も受ければ大体わかってきて、好き勝手に言い放題。特に今年の新入生は自己主張が激しくて、えらく授業時間を使ってしまいました。

こういうことをするから、予定通りに授業が進まず、期末に困ることになるのですが、伝えたい事は伝わっているので、まぁ、よしとします。

坂口伊都

8月20日に京都国際社会福祉センターの社会福祉講座「家族という発達の場を支える実践」の一つとして「子どもとの信頼関係の築き方～中途養育・養育里親の可能性～」というお題で話す機会をいただきました。これまでに児童虐待というような内容で話すことはありましたが、自分の家族の日常を2時間半も話したりしないですよね。時間が長いので、里親制度や社会的養護の現状についても話しましたが、実際に資料を作ったりする中で自分自身が何を語ろうとしているのか、どんな風に語り始めるのかを知るいい機会になりました。

里親委託からちょうど 1 年、まだまだ日常的に揺れている最中です。実際に話し始めると、自分がしんどいと感じている部分が表面上に現れる感じがしました。同じ話でも、もう少し違う視点、言い回しもできると感じました。きっと、これが半年後だったら、また違う語りになるのだと思います。話をしながら、第三者的に自身を振り返る作業をして、これからどうしていこうかアイデアが沸いてきました。これもなかなか不思議な体験です。確かに養育里親はしんどいことも沢山ありますが、知恵を持って取り組んでいけば、何かが見えてきそうな気がしています。どうせするなら、意地でも楽しみたいです(笑)そう言っている間はもがいているのですね、きっと。

河岸由里子

北海道　かうんせりんぐるうむ
かかし　主宰

北海道なのに、今年の夏はやけに蒸し暑い。家にクーラーがついているが、今まで殆どつける事は無かった。しかし今年は毎日つけている。ドライだけの時もあるが、冷房にしないと涼しくない。夜は流石に窓を開ければ涼しく眠れるので、夏バテする程ではない。早く涼しくなって欲しいが、北海道は涼しくなったと思ったらすぐ冬が来る。それもちょっと・・・と思う。

さて、前回まで書き続けていた「先人の知恵から」は、しばらくお休みし、今回から新しい連載にした。というのも、「先人の知恵から」は 13 回まで来ていてまだ、あ行しか終わっていないことに気付きこの調子で書いていたら、いつまでも終わらないことに思い至ったからである。ただ、中途半端は嫌いなので、又いずれ書き始めるとは思う。(笑)

今回から「境界」のことについて、あれこれ思うことを書いてみようと思う。興味があったら読んでみて欲しい。

岡崎正明

もともと涙が出ないタイプだ。

幼い頃はそのせいで「自分は冷たい人間なのでは」と気にしたことも。泣いている人が励まされるのを見て、羨ましく感じたことも 1 度ではない。感情を爆発させてオイオイと泣く。そんなことができたのは、いつが最後だったろうか。

そんな私もここ最近、明らかに以前と比べてウルウルしやすくなったと感じる。さすがに涙がほほを伝う…まではいかないが、感動の場面に出会うと鼻の奥から目頭にかけてヅーンとしたものが走り、目が潤うのを感じる。たいてい自分のことでは無い。テレビや映画などの出来事。リオ五輪なんて、分かりやすいほど反応してしまった。「あの愛ちゃんがねぇ～」とか。ほとんど親戚のおばちゃん状態。

歳を重ねると涙もろくなる、とは言うが、その理由としては「脳の機能変質・低下」とか「共感性の成熟」が有力らしい。個人的には後者により納得がいく。様々な経験を自らがすることで、人は相手の立場に立って考えることができるようになる。なるほど。経験がない子どもが恋愛小説を読んでも、ピンとこないのは当然。子どもの方が縛られない創造的な想像力(ややこしいな…)は豊かな気がするが、相手の気持ちに思いを馳せたり、共感・追体験したりする力は、経験を得て高まるのだろう。

そういえば以前から不思議だったのが、満開の桜や紅葉する山を見て「きれいだなあ」と感じる感覚。あれも幼い頃より、今の方が断然感動できる。「毎年見るのだから、年が経てば経つほど飽きてくるのが道理では」と思っていたが、ひとつの風景に様々な経験を重ね合わせて想いを馳せ、人は感動するのだろう。ただ景色を見ているだけではないのだ。

年を取ることは感動が増えること。そう思うと、なんだか楽しみな気もする。私の涙腺が決壊し、オイオイ泣ける日が来るのも、そう遠くない。

buimen0412@yahoo.co.jp

千葉晃央

車で秋田から京都へ帰省をした。片道830キロ。全行程を1日で完走。ドライバーは私一人。もう何度目かわからない。その行程を振り返る。

朝4:00出発。◆京都～敦賀インター◆:自宅から向かうのはまず大原。このあたりでの渋滞ポイントは名神高速の京都南インター、京都東インター、大津インターのあたり。帰省の時期では慢性の渋滞。だから乗らない。大原から途中峠を越えて、滋賀に入る。無料になった湖西道路に入り終点まで北上。地道に出ても更に北上で敦賀まで。敦賀手前のあたりには

大型トラックも多くカーブも多いので運転注意。さびれたスキー場が印象的な景色。湖西からみる琵琶湖、特に白髭神社の湖に浮かぶ鳥居の景色が日の出と重なり美しい。

◆敦賀インター～北陸道・新潟◆：北陸道で福井から石川には直線の箇所が多く、スピードの出しすぎ注意。アクセルの踏みっぱなしの足が負担なので、態勢をかえて足を休ませながら運転。左手に日本海が広がり美しい。時間があると徳光ハイウェイオアシスで休憩をして砂浜まで行き、波打ち際で遊ぶことができるが今回はスルー。金沢、富山のあたりでは交通量が増加することが多い。しかし北陸道は基本的に渋滞はめったに起こらない。起こるのは事故渋滞がほとんど。以前あった旧美川町の「美川　県一の町」の看板が印象的だったが現在はない。新潟に入ると大きな2つのスタジアム（新潟野球場 新潟スタジアム）がとてもきれい。ガソリンは満タンで京都をスタートし、ここのあたりまでで半分にはなるので給油。それで秋田まで持つ。高速のガソリンスタンドは黒崎サービスエリアがラスト。それ以降は次第に対向の2車線になり一直線になっていく。北陸道が終わり、日本海東北自動車道となる。現在は高速で新潟の村上地域の朝日まで行くことができる。このあたりは軒先に鮭が一本まるまる干してある景色にも出会う。朝日インターで高速を降りると急カーブとアップダウンが続く山道がある。そこを走ると運転している自分も車酔いをしそうになるほどダメージが大きい。山道で景色も単調でつらい。そのためそこを回避して、二つ手前で高速を降りて、「笹川流れ」のある日本海沿岸の国道345号道を走る。この季節はいくつもの海水浴場を通り過ぎていくことになった。このあたりの海は沖が青く、手前が水色でとても透明度も高くきれい。漁港あり、盆w）ヒ戮蠅僚煖u梍ワ様子あり、大漁旗がはためくし、海水から塩をつくる施設も多数あり。冬には波の花が道路にも舞い、その中を走ることができる幻想的なポイントでもある。このあたりでスーパーマーケットで関西にはない「筋子おにぎり」を購入し、昼食。一服してスタート。◆山形　山形道～秋田◆：この区間はあつみ温泉～酒田間の高速を利用するのがはやいとされている。今回は酒田の土門拳記念館に行くのもあり、ひさしぶりに山形道は利用せず、海岸線を北上。クラゲ専門の加茂水族館をスルーして、庄内空港の地下をくぐって進む。冬の防風対策のための松の防風林がつづく。海岸線は地面が砂地で果物畑（メロンなど）が続く。左手に日本海をみながら進むために景色がよくつかれにくい。遠くで雨雲が雨を降らす様子が見えたり、雲間から海原に日差しがさしたり、非常に美しい。◆秋田～ゴール◆：山形の酒田から秋田方面に進むと右手に鳥海山が見えてくる。夏でも白い雪をたたえている。少しでも雲が出ると標高が高いのですぐ山が隠れてしまう。5月にこのルートを走ると鳥海山の姿が水をはった水田の水面に移り、逆さの鳥海山も観ることができる。秋田に入ると秋田も結構長い。新潟ももちろん長いけどこの道程では秋田も長いという実感がある。秋田の象潟（きさかた）のあたりから高速に。秋田市の手前の岩城までいくことができる。今回はその手前の亀田インターを降りて、映画「砂の器」ロケ地のJR羽後亀田駅による。このあたりは天鷺ワインが有名。「亀田うどん」というものがあることを今回は知る。小説「砂の器」にも描かれていた。そこから秋田市へ向かう。このころには夕陽が太平洋に沈むのを見ることができる。海岸の7号線は途中に何度も風力発電の風車をみながら進む。雄物川を渡り、トンネルがあり、右に折れて市内へ。到着である。今回は全行程14時間程度。燃費は17.2キロ（1500ccガソリン車　大人1名　子ども2名乗車）。まぁこんな感じ。18時過ぎに到着。数日後に復路。帰りはこの逆。新潟の黒崎サービスエリアにあるモスバーガーがたのしみ！

大谷多加志

ここ数ヵ月、珍しく出張続きです。出張など日常という職場の方もおられるでしょうけれど、私の職場では年に 1 度あるかどうかですので、それが続くというのはなかなかに珍しいことなのです。福岡県に 1 回、岐阜県に 3 回、神奈川県に 1 回の予定です。そのうちのいくつかは、K 式発達検査に関しての研修や講演を依頼されて、あちこちに伺っていたりします。研修の時には自己紹介がてら、必ず対人援助学マガジンの話もします。「対人援助学会という学会が出している定期刊行誌でして・・・」「インターネットで見られる Web マガジンで・・・」という辺りはみんなうなづきつつも少し距離がある感じで聞いておられます。最後に「無料で誰でも見られます」と続けると、戸惑いのような、感心しているような、何とも言えない反応が返ってきます。この反応を見るのが、結構好きです。

竹中尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職

先日、ひそかに贔屓していたハム屋が閉店した。なかなか美味いハムを作るので、知る人ぞ知るハム屋だった。一時はテレビ番組でも取り上げられたりして、食通や調理人の間では全国的に知られたハム屋だった。地元では近所の肉屋だと思っている人も多かった。街角の肉屋という店構えで、奥さんが切り盛りをしていた。店の奥に工場があってハムなどを作っていた。原料としての豚肉や牛肉の価格と製品の価格が合わなかったようだ。私も、めったに作らないがベーコンを年に1、2回程作る。趣味である。ハムやベーコンを一般的な価格で作れないのはよく知っている。ハム屋の夫婦はチャレンジャーだった。

◆自分の好きな事を仕事にしたら、それを成り立たせるのは相当の力量と運が必要だろう。困難だけれどそんな人がい

ないと、計算で成り立つ仕事ばかりになってしまう。面白くない社会になってしまう。

◆今、団塊の世代が定年退職をしていく。面白い人が多かったように思う。後の世代は、自分の守備範囲を一歩も出ずに、計算できる仕事だけをする人が多いように思う。「それは自分の仕事の領域ではない」と言う人が多くなった。自分の仕事が面白いのだろうか、好きなのだろうかと思う。ところが、若い世代にこの仕事が好きで、この仕事をしていますという人を見かけるようになった。雇用形態の変化で割を食った若い世代が頑張っている。その変化に怯えて仕事をする先輩世代は哀れである。あなたは死ぬときに、「楽しい人生をおくれた」と思って死ねるだろうか？

川﨑二三彦

メイキング・オブ

動画版

「ジェノグラム、描き方のコツ」

この間、膨大な時間を費やして、ひたすら自宅 PC で作業していたのは、子どもの虹情報研修センターホームページで公開するための、動画版「手に取るように家族がわかるジェノグラム～描き方と活用のコツ～」。

動画でジェノグラムの描き方を説明している例は、知る限り見当たらないので、これまでの多くの解説より、絶対的にわかりやすいはずである（と、私は信じています）。

そもそも、なぜこのような動画を作成したのかというと、私が所属する子どもの虹情報研修センターでは、さまざまな形での情報発信を業務の一つとして位置づけていること、横浜のセンター研修に参加できない方も多いことから、動画によるミニ講座をつくろうという機運が高まっていたことなどが挙げられる。

こうした流れを受けて、早速思いついたテーマが「ジェノグラム」である。というのも、研修参加者が描くジェノグラムがあまりにも多様で（はっきり言えば、わかりにくいこと甚だしく）、多くの人が作図で苦慮していると考えられたからである。

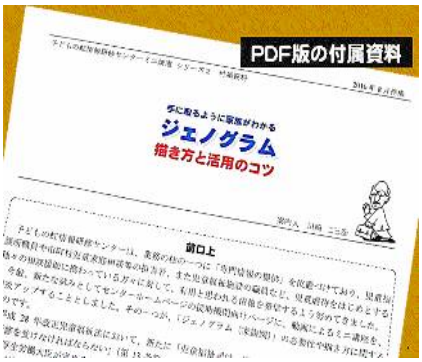
＊

私は、児相研（全国児童相談研究会）が主催する「新人児童福祉司研修ワークショップ」で、毎年ジェノグラムをテーマに演習を行ってきたのだけれど、こうした状況に鑑みて、新人児童福祉司に限らず、援助機関の多くの人にジェノグラム作図の基本を伝えなければならないと感じていた矢先、センターのミニ講座企画が持ち上がったのであった。

そこで、昨年の夏には早くも作成に取りかかったのだけれど、完成までには紆余曲折があった。

まずはスライドの作成である。講演依頼などがあって事例を紹介する場合、私はほぼ全て、スライド上でジェノグラムを描きながら解説している。これだと、文字や言葉だけで説明する場合に比べて圧倒的に理解を得やすい（と、私は感じている）。少なくとも説明する側は、（作成には時間がかかっても）講演当日、非常に楽に説明できることから、ジェノグラムの便利さ、わかりやすさを日々実感していた。

そんな経験もあって、スライド上で少しずつ描き進めることはお手の物だと思ってはいたものの、過不足なく完成させるようとして、大変苦労した。結果として、出来あがったスライドは、総枚数こそ、（タイトル画面なども含めて）約 80 枚程度におさまったものの、何しろ記号の 1 つ 1 つ、それらを繋ぐ線の 1 本 1 本を、その都度動かしていくのだから、1 枚のスライドで百回以上のアニメーション操作をするような場合も出現。これだけでも膨大な時間と大変な作業を強いられたのである。



なお、スライド作成に際しては、少しでも親しみやすいよう、当マガジン編集長、団士郎さんの好意で描いてもらった私の似顔絵も活用させていただいた。この場を借りて御礼申します。

それはさておき、もっと厄介だったのが音声の吹き込み。夜間、雑音の少ない時間帯を中心にマイクを握るのだけれど、何しろ原稿なし、自分でパワポをクリックしつつ、自分で喋るのだから、失敗続きで、その度に取り直し。試行錯誤を繰り返すうち、遅まきながらスライドごとに分けて吹き込みができることに気づき、多少の時間短縮ができたとはいえ、たった 1 枚のスライドを 10 回以上取り直したことも珍しくはなかったのである。

＊

さて、どうにかこうにか完成させたものの、視聴してみると不備が目立つと言わざるを得ない。すぐにでも修正したいのだけれど、ここまで苦労したのだから、とにかくセンターホームページにはアップした。

作品は 6 部 7 つのファイルに分かれていて、全体版だと 95 分。それに紙ベースで印刷可能な付属資料も PDF で添付した。

稚拙ではあるが、精一杯の作品。皆さん、是非ともご覧下さい。

スマホでも十分視聴できると思います。

なお、アップしている場所は、子どもの虹情報研修センターホームページの援助機関向けページ（「ミニ講座」欄）。ここに入るにはパスワードが必要です。援助機関の方々で関心のある方は、所属やお名前を明記して、私宛て（kawasaki@crc-japan.net）に問い合わせてください。

それはさておき、先にも述べたように、本作は試作品の域を出ていないとも言え、改善点が多々あるので、今後バージョンアップする予定です。ご覧になって、忌憚のないご意見をお寄せください。

連絡先は、info@crc-japan.net で OK です。　（2016/08/28 記）

荒木晃子

どうやら、この猛暑に「お盆休みがなか

った」というと、間違いなく同情されるようだ。当の本人は、新たな出会いと新しい取り組みへの第一歩を踏み出す好機をもたらしてくれたこの夏に休暇は不必要で、かえって感謝したいほどなのに。はるばる遠方から、盆休み＆夏休みを利用して来阪した、性別違和に悩むM母子への支援は、これから私がMの人生のサポーターになるための登竜門だったに違いない。今後のMの人生において、Mが必要とする教育現場、医療現場の援助者へ確実につなぐため、多くの専門家仲間のチカラを借りつつ継続した支援が続くだろう。私は、ここにその支援の足跡を残していこう。後に続く、Mのような子どもたちに。登竜門の先にある自分の人生の成功者に、彼らがなるために。

＜娘より：三回忌を終えて母に捧ぐ＞

見野 大介　みのだいすけ

9月・10月の出展のお知らせです

【 陶のかたち展 】

会期：2016.9.17－9.19　11：00－17：30（最終日17：00まで）

会場：京都文化博物館（京都市中京区三条高倉）

124人の若手作家・職人のアート作品を展示販売しております。

【 カフェとガンプラと私 】

会期：2016.9.18－9.24　11：00－23：00（土日18：00まで）

会場：cafe unlock function（奈良市法華寺町237-3）

ガンプラと陶器のまさかのコラボレーションが生まれます。

【 アートクラフトフェスティバルinたんば 】

会期：2016.10.1（10：00－17：00）　10.2（9：00－16：00）

会場：兵庫県立丹波年輪の里（兵庫県丹波市柏原町田路102－3）

170人の工芸家による巧みの技と心のこもった作品が集まります。

【 信楽セラミックアートマーケット 】

会期：2016.10.8－10.10　9：00－17：00

会場：陶芸の森（滋賀県甲賀市信楽町勅旨2188－7）

「作品に触れ作家に触れる」をテーマに県内に在住、在勤の陶芸をはじめとする作家が、自らが制作した質の高い作品の販売をおこなう、作り手と使い手の出会いの場です。

【 使って楽しむ器展 】

会期：2016.10.11－10.23　10：00－17：00（17日休廊）

会場：Gallery&Cafe AQUA（和歌山市満屋186－7）

長皿と飯碗をテーマに、展示と実際に作家の器を使ったカフェメニューを用意します。

【 見野大介陶展 in 東京 】

会期：2016.10.21－10.29　10：00－20：00（土曜19：00まで　最終日17：00まで）

会場：陶右衛門赤坂店（東京都港区赤坂1－3－5）

東京での初個展になります。

10月までは上記の通りで、11月は個展を含めて4つあります。

…詰め込みすぎたことを少々後悔しております。年内は必死のパッチで働きます。

鶴谷主一

昨日 8/23 が始業式で、今日はその翌日2学期2日目の幼稚園だった。

毎年思うことだけど、「やっぱ夏休みっていい！」

久しぶりにクラスにやってきて友だちと会った子どもたちは、お喋りが止まらないそうだ。夏にどこ行った、ここ行ったという話や、何ができるようになったという話で年少から年長まで、もちろん年齢が上がるにつれてお喋りの盛り上がり方もアップしてくるのだが。

この夏に、グーンと成長した子どもたちを見てみると、家族が子どもたちのために何かしらの経験をさせたいと行動を起こしたり、田舎の祖父母に会ったりして人間関係が広がった経験、苦手だった水あそびをお父さんとプールに通って克服し、自信を持って2学期のプールに向かった話など、夏休み効果の話は尽きない。

反面幼稚園ではレアケースだが、おそらく夏休み中家の中に閉じこもって、母親や祖母に甘えてベッタリだったんだろうなあーと想像される年少児は、自立度が下がって、1学期にできていたことができなくなっていた（トイレでの排泄や着替えなど）。これは残念な話･･･2学期にもう一度取り戻さなくてはならない。

夏休みをいいものにするか否かは、家族の関わりによるよるんだと改めて感じさせられたところ。ところで、自分にとっても、教職員にとっても充電することのメリットは大きい。保育園やこども園が主流になってくると、子どもたちの大事な休暇が縮小されていってしまうだろう、ちょっと淋しい気がする。

原町幼稚園
http://www.haramachi-ki.jp
メール
osakana@haramachi-ki.jp
ツイッター
haramachikinder

木村晃子

北海道生まれ、北海道育ち。どこよりも、北海道が好きだ。北海道は広すぎて、自分の生まれ育った土地と言っても、知らないところはたくさんある。最近は、仕事で北海道内を回ることが多くなって、道中を楽しむこともできている。

先日は、亡き父の生まれ故郷に立ち寄ることができた。美幌峠。絶景だった。父がこの景色を気に入っていたことを思い出す。自然の力は大きい。この雄大な北海道で生きる人間らしく、大きな心を育てていきたいと感じた。

乾明紀

前回、前々回の短信に「肌の痒みが未だ治まりません。乾燥する季節はとっくに終わったのに･･･」と書きましたが、結局 8 月になっても治まりません。8 月後半に京都東山からより自然の多い箕面に引っ越しましたが、今のところ（引っ越して約 1 週間）変化はありません。しばらくは投薬と塗り薬を続けることになりそうです。

話は変わりますが、6 月に次男が誕生しました。上の子がまだ 2 歳なんで、なにか

と大変（この原稿を書いている途中も、次男を抱っこしたり、腹痛を訴える長男のお腹をさすったりして、何度も手を止めることになりました）ですが、手間がかかる時だからこそ、その時間を大切にしたいと思っています。

団士郎

急いで死にたいわけではないが、そろそろ人生の終点時刻を考えておいてもいい年齢にはなった。（と、こんなことを言ってる人に限って長生きする、というのも慣用句だから、どちらにも大した意味はない）。寿命のことなど分からない。ただ、生まれて初めて、自分がいなくなる時のことを最近は思う。

思春期、青年期に死を考えたことが、一度も記憶にないという、文学性も哲学性もない人間だった。だから今も、深く考えているとは、とても思えない。ただ、そうか、いつかは居なくなるんだ。そして、そう遠い話ではないかもしれなくなったのかと思うのである。

常々、近しい人とは、出会う機会を多くして仕事をしているから、突然いなくなっても、会っておけばよかったと悔やむことは少ない。いや、これは相手さんの方のことか。

それは、私の父母とがそうだった。

母が突然亡くなった日の朝も、私は仕事に出かける前、しばらく座って話し込んでいた。数年前、父を亡くし二所帯住宅の一階に住んでいたのだが、八十代半ばを過ぎた頃から、いつ居なくなってもおかしくない。だから、話せる時には話しておこうと思っていたのだ。

告別式も、その後も、ああしておけば良かった、もっとこう出来ていたら・・・と考えることはなかった。

むしろ、父が亡くなって母が一人になってから、次男（母には孫）の結婚式をハワイでするのに、一緒に行った時のことを思い出す。

滞在中、母を誘って二人でワイキキの衣料品店に出かけた。そこで、アロハを買ってあげるからと勧めた。「いつ着るかわからないし・・・」と躊躇するのを、「今着て帰ればいいよ」と試着室に押し込んで、赤い花柄のアロハ婆さんにした。それを着て、オープンテラスで朝食を食べたツーショット写真が良い感じだ。

両親とも、十分生きたし、楽しかったと思う。私の文春新書が出たとき母は、新刊書を、せっせと嬉しそうに親戚に郵送していた。

私もそんな風に、良い思い出をまき散らして、時が来たらスッと居なくなりたい。

＊

（A）東京・東小金井駅近くの店先でのこと。気に入ったラーメン屋にちょくちょく出かける彼女は、その道中の店先に「木陰の物語」（配布版）が置いてあるのを見つけた。「どうしてここにこれが？」と思わず店の人に声を掛けた。

（B）自分の働く会社の仕事で、数年関わってきた冊子の編集。毎年、夏前から取りかかって、出来上がったものを全国に届ける仕事もすっかり定着した。ダブルワークを推奨する会社なので、彼女は自分のお店を持っていて、たまたまその日、店番をしていた。

（A）は、中西万依さん。マガジン執筆者水野スウさんの娘で、本誌連載の原稿は彼女が編集して完成原稿として私の所に届けてくれる。ミニコミ「ほめ言葉のシャワー」は小さな巨人になって、全国の人々に読まれている。あの編集は万依さんの仕事だ。

（B）は、やまざき薫さん。ホンブロック勤務で、木陰の物語の制作・発送に携わっている。ホンブロックはkkアソブロックの出版セクションで、「家族の練習問題１～６」など、家族に関わる出版をおこなっている。

この面識のない二人が東小金井で冊子を間に遭遇した。「木陰の物語」の新たな物語の始まりである。

どこかで、誰かと誰かが思いがけない遭遇をし、その触媒に漫画作品がなってくれている。作家冥利である。